my dear story

マイ・ディア

＊親愛なる物語＊

saeko himuro

氷室冴子

角川

マイ・ディア

氷室冴子（ひむろさえこ）

角川文庫 8100

平成二年十一月十日　初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話　編集部（〇三）八一七—八四五一

営業部（〇三）八一七—八五二一

〒一〇二　振替東京③一九五二〇八

印刷所——新興印刷　製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ひ 5-4

ISBN4-04-174004-5　C0193

江苏工业学院图书馆
藏书章

視愛なる物語

氷室冴子

角川文庫 8100

目次

まえがきにかえて　五
いとしのマシュウ　『赤毛のアン』　二
オルコットかモンゴメリか　『八人のいとこ』『花ざかりのローズ』　四
ハウス食品におねがい　『リンバロストの乙女』　七
ストーリーテリングということ　『若草の祈り』　九
軽やかなワルツみたいに　『少女バレアナ』　一七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ミスターの魅力　一四三
『少女レベッカ』『レベッカの青春』
心ふるえて……　一六九
『十七歳の夏』
ひとやすみにお茶を……　一九一
『秘密の花園』『あしながおじさん』
『丘の家のジェーン』『昔気質の一少女』他
〈付録〉友人Aへの手紙　二三七
あとがき　二六四

本文イラスト　きたのじゅんこ

まえがきにかえて

私は仕事がら、今でも本はけっこう読むほうだけれど、なぜか、むかし読んだ本のほうが、はっきり印象に残っています。

こどものころ、クリスマスのたびに、本を一冊、買ってもらうことになっていました。

クリスマスに一冊とは、ずいぶん少ないじゃないか、ほかの364日は本を読まなかったのか――といわれると、困るのですが。

つまり、

「これは、サエコの本だよ」

といって買ってくれたってことです。ここが、大事なのです。

私には六つ年上の読書ずきな姉がいて、姉の本棚をさがせば、たいていの本はそろっていました。

しかし、六つ年上といえば、私が小学一年生のとき、おねえちゃんはすでに小学六年生。

小学六年生の本棚には、『坊ちゃん』だの『路傍の石』だのラムの『シェークスピア物語』だのがズラーッと並んでいる。

これを小学一年生に読めといっても、ムリな話というもの。

さすがの母も、これじゃマズイと思ったらしくて、サエコ専用の本を買おう、と思ったらしいのです。

しかし、どこまでいっても教育ママと優等生のおねえちゃんは、本を選ぶときにも、すさまじい権力をふるうのでした。

雪がふりしきる夕方、クリスマス用のケーキや赤玉ポートワインを買ったかえり、本屋さんにゆく。

私としては、すっかり気持ちが固まっていて、

（学芸会でやった『オオカミと七匹のひつじ』を、ぜったい、ぜーったい、かってもらうんだもん）

とウキウキ期待している。

なのに、母と姉が一致してスイセンしたのは、なんと。

『野口英世』

の伝記なのだった！

なにが悲しくて、いたいけな小学一年生が、しんきくさい医学博士の伝記なんか読まなきゃならないのだ。

私は激しく抵抗して、ウソ涙まで流しながら、

「『オオカミと七匹のひつじ』がいいよォ。これは、オオカミにくわれたひつじが、みんなチエだして、助かるんだよ。えらいんだよ」

と大人ウケしそうなテーマを力説したのだけど。

おねえちゃんはひとこと、

「スジ知ってるんなら、もう読むことないじゃない。エライ人の伝記よむと、勉強になるのよ。伝記を読まなきゃ」

というのです。

おねえちゃんは絶対にエライと確信している妹は、しょんぼりするばかり。

さらに、おいうちをかけたのが、狼(おおかみ)のようにズルがしこい母で、

「そうそう、このあと、松屋の地下で、アイスモナカ食べようと思ってたんだ。『野口英世』の本を買うんだったら、アイスモナカを食べようっと。ひつじの本買うんだったら、モナカはナシにしようっと」

聞こえるようなヒトリゴトを、いうのであった！

大人ってズルいよなあ。

しかし、食いイジのはった私もなさけない、ついついアイスモナカにつられて、

「なら、『野口英世』でいいよ」

と手を打つところが、なんともかんとも……。

こうして買ってもらった本を、私はしぶしぶながら、何回も何回も何回も、たぶ

ん百回くらいは読みました。なんたって、〈あたしだけの本〉ですから。

おかげで、その本はとうに失ってしまったのに、最初の数行は、二十数年たった今でも暗唱できるほどです。

「あぶない。あぶない。赤ちゃんが、いろりに近づいてゆく。お母さんは野良仕事にいっていて、家のなかには赤ちゃんだけ。

チロチロもえるマキの火をつかもうと、赤ちゃんがはってゆく――」

というもの。

野口英世は、幼いころ清作といって、清作ぼうやは赤ちゃんのころ、いろりの中におちて、手にすごい火傷を負うのですけれど、そのときの描写です。なかなか迫真的。

そして、最後の一行は、

「母の愛は、猪苗代湖のみずうみよりも深く、磐梯山の山よりも高いのだった」

というものでした。

この最後の一行にたどりつくと、私はついつい声にだして朗読してしまい、あげ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くに自分の朗読に感動して、ドーッと涙を流していました。

野口博士の偉大さに泣くというより、リズミカルな文章のもりあがりに、感動してたらしいです。そのうち、朗読をはじめる前から、パブロフの犬みたいに泣いてました。

母とおねえちゃんの教育の成果は、それなりにあったわけです。

♡ ♡

小学二年生のときのプレゼントは、伝記路線をつっぱしって『ヘレン・ケラー』。これは、挿絵がきれいで、やっぱり何度も読みました。

おかげで今でも、ヘレン・ケラーはアラバマ州のお金持ちの娘だったとか、電話を発明したアレキサンダー・グラハム・ベル博士とか、ヘンなことを知っているけれど……現実には、なんの役にもたってないです。

小学三年生のときのプレゼントは、なぜかファンタジー路線に変わり、『鏡の国のアリス』。挿絵のアリスがバケモノみたいで、コワかった。

小学四年生のときのは、唐突に、『家なき子』。これは活字がいっきに小さくなっていて、挿絵も少ない本で、苦労しました。クラい話だったなあ。

小学五年生のときのは……覚えてない。

小学六年生のときには、『赤毛のアン』。

さて。

この『赤毛のアン』が問題です。

この本を買ってもらったころには、クリスマスの本のプレゼントも、あまり嬉しいものではなくなっていました。

母が買ってくれる本よりも、おねえちゃんの本棚を探したほうが、おとなっぽい本や、読んでおもしろい本がたくさんあったのです。

読書ずきなコが、他の読書ずきなコにライバル意識もやして、どんどん難しい本を読んでゆくように。

私もやっぱり、どんどん世界名作全集や日本名作全集を読むようになっていました。

モームだの、フォークナーだの、トルストイだの、ドフトエフスキーだのと、作家の名前を知ってるだけで、

（あたしって、かしこぉい！）

と思う年頃だから、『赤毛のアン』なんかガキくさくて、およびじゃなかった。

だから、『赤毛のアン』は読まずに、ほうっておきました。

中学になってからの愛読書は、推理小説をべつにすれば、『ジェイン・エア』や『レ・ミゼラブル』や『モンテ・クリスト伯』なんかでした。

ぜんぶダイジェスト版（短縮版）だったけれど、最高におもしろかった。

とくに『ジェイン・エア』は大好きで、何度読んでも、ジェインが毅然として、ロチェスターに別れを告げて、出ていくところに、

（ジーン）

となっていました。

そのころ、ひとつ部屋で一緒だった大学生のおねえちゃんに、

「ジェインはチビだしさ。あんまし美人じゃないけど、でも、あたしに似てない？

意地っぱりなとことか、気のつよいとことかさ。あたし、ジェイン、好きだなあ。好きなのに、ロチェスターと別れるとこも好き。りっぱだよね」

と感想をしゃべり、当時はすでに英文科の学生だったおねえちゃんは、

「あたしは、エミリ・ブロンテの『嵐が丘』のほうが好きだな。すごくドラマチックでしょう」

などと、ちゃんと、話し相手をしてくれました。

それにまた、

「サエちゃんの読んでるのはダイジェストだから、どうせ読むんなら、全訳を読むといいよ」

なんていって、全訳の本を買ってきてくれたりもしました。

全訳ものは、スジとは関係のない、ごちゃごちゃした描写もおおくって、内心うんざりしたもんだけど、おねえちゃんは、

「イギリスの雰囲気が出てるでしょ。木とか、城館とか。そういうの読んで、いろいろ想像してごらんよ。今度、NHKの教育テレビで、ローレンス・オリビエの

『嵐が丘』があるから、いっしょに見よう。雰囲気わかるよ。そのとき、イギリスの写真集、図書館から借りてきてあげるからね」

なんてアドバイスしてくれたりもしました。

こうして書いてて、われながら、感動してしまう。

涙がでるほど、教育的な、いいおねえちゃんだなあ。

だが、しかし。

こういうデキた姉がいると、妹はバカにされまいと意地をはってしまうものです。

クラスメートがおもしろいといってるような本は、読みたくない。

大学生のおねえちゃんと感想をいいあえる本を読むほうが、おとなっぽい。

というわけで、初恋にモンモンしていた十三、四歳のガキなのに、サガンの本なんか読みふけって、

「恋って、結局、エゴイスティックなものよね、おねえちゃん？」

かなんか、アンニュイに呟いてたのでした。今から思うと、ほとんどコメディだね、こりゃ。

そんな私が、『赤毛のアン』シリーズを読むようになったのは、中学も卒業まぢか、というより高校生になってからでした。

たまたま、アン・シリーズを全部もってるクラスメートがいて、貸してくれたのがきっかけでした。

でも、私はついぞ、アン・シリーズについて、おねえちゃんに話しかけたり、感想をいったりすることはありませんでした。

『赤毛のアン』なんか話題にしたら、バカにされるんじゃないかと不安だったのです。

本を読むのが、ほんとうに好きだったくせに、いつのまにか、読んだ本の冊数や、厚さや、難しさなんかを誇る気持ちも、持ちはじめていたのでした。

だから、私は今でも、有名人の「愛読書アンケート」なんかで、みなさんがすごい名作や、反対に、誰もしらない超マイナーな本なんかを出してくるのを見ると、ふと不安になるのです。

（このヒト、ほんとにこの本が、眠れなくなるほど好きなのかしら。スジはとっく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com